

A nationwide survey of pediatric acquired demyelinating syndromes in Japan

高田, 結

<https://hdl.handle.net/2324/1866371>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）



氏 名：高田 結（旧姓 山口）

論 文 名：A nationwide survey of pediatric acquired demyelinating syndromes in Japan

（ 日本における小児後天性脱髄症候群の全国疫学調査 ）

区 分：乙

論 文 内 容 の 要 旨

後天性脱髄症候群（ADS）は後天的な中枢神経系の炎症性脱髄を特徴とする神経疾患の総称であり、急性散在性脳脊髄炎（ADEM）、多発性硬化症（MS）、視神経脊髄炎（NMO）を含む概念である。我々は、我が国の小児 ADS の実態を明らかにするために全国調査を実施した。

標準的な疫学調査手法により病院を選出し、2005-2007 年に受診した小児 ADS 患者数を調査した後、調査票を用いて臨床像を調査した（九州大学医学研究院等倫理委員会承認番号 20-64）。患者数調査（回答率 74.0%）では、小児 ADS 患者 439 例（含 ADEM 244 例、MS 117 例、NMO 14 例）が集積され、臨床像調査（回答率 74.9%）では 204 例（含 ADEM 66 例、MS 58 例、NMO 10 例）が集積された。解析の結果、我が国の小児 ADEM の推定罹患率は小児 10 万人当り年間 0.40 人（95%信頼区間：0.34-0.46 人）であり、北部で低い傾向を認めた。一方、小児 MS の推定有病率は小児 10 万人当り 0.69 人（95%信頼区間：0.58-0.80 人）であり、南部で低い傾向を認めた。小児 NMO の推定有病率は小児 10 万人当り 0.06 人（95%信頼区間：0.04-0.08 人）であった。小児 ADS 患者の男女比と発症平均年齢は ADS のタイプによって異なり、女性の割合が高いタイプほど発症年齢が高かった。本調査により我が国の小児 ADS の疫学的ならびに臨床的特徴が初めて明らかとなった。